

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 12 日現在

機関番号：82611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K20756

研究課題名(和文) 養育者の適応力に着目した発達障害支援策の発展に関する研究

研究課題名(英文) A policy for supporting caregivers of children with developmental disorders due to parenting resilience

研究代表者

鈴木 浩太 (Kota, Suzuki)

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 知的障害研究部・流動研究員

研究者番号：20637673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、養育者の適応力を向上させる要因を明らかにし、発達障害支援策を提案することを目的とした。注意欠如・多動性障害に対する夏季治療プログラムの参加児の養育者に対して調査を行い、子どもを対象とした治療であっても、養育者に対して、好ましい効果があることを明らかにした。また、発達障害児をもつ養育者の適応力を向上させる要因を検討するために、地域や家族のサポートの状況を把握する質問票を作成した。発達障害児をもつ母親を対象として、その質問票と養育レジリエンス質問票を用いた調査を実施した。養育レジリエンスの要素に、地域や家族のサポートが与える影響を検討した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to examine the factors enhancing parenting resiliency. Kurume summer treatment program enhanced scores of parenting resilience elements questionnaire (PREQ), suggesting that intervention for children improves parenting resiliency of caregivers. In addition, we newly made a questionnaire for evaluating supports of community and family. We recruited mothers of children with developmental disorders from medical institution, and examined the relationship between PREQ and the new questionnaire.

研究分野：発達障害学

キーワード：レジリエンス 養育者支援

1. 研究開始当初の背景

発達障害児の特徴は、問題行動につながる可能性がある。問題行動は、育児困難に関係し、発達障害児をもつ養育者は、精神的健康度が低下するリスクがある。このようなリスクがあるにも関わらず、発達障害児をもつ養育者の多くが、子育てに良好に適応している。研究代表者は、発達障害児をもつ養育者が子育てに良好に適応するための要素に着目してきた。

一般的に、困難な状況にも関わらず、良好に適応する過程は、レジリエンスと定義される。研究代表者は、レジリエンスを、発達障害児をもつ養育者に適用するために、「育児困難にも関わらず、良好に適応する過程」を養育レジリエンスとして定義した。インタビュー調査で、養育レジリエンスの要素を明らかにし、その結果に基づき、その要素をもつ程度(適応力)を計測する養育レジリエンス要素質問票(Parenting Resilience Elements Questionnaire: PREQ)を開発した。

2. 研究の目的

研究開始当初において、養育レジリエンスの要素が明らかになり、適応力を計測するPREQが開発されていたものの、この要素が発達障害の臨床においてどのように関わると不明な点が多かった。

そこで、本研究では、発達障害児の治療において、適応力の関与を明らかにすることを目的とした。さらに、様々な介入を受けることで、適応力が向上する可能性がある。この適応力を向上させる要素が明らかになれば支援体制を提案できることが考えられたので、適応力を高める要因について検討した。

3. 研究の方法

夏季治療プログラムの参加児の養育者を対象とした調査

ADHD 児を対象にした夏期治療プログラム(くるめ summer treatment program: くるめ STP)の参加者を対象とした。くるめ STP では、行動療法に基づき問題解決スキル、ソーシャルスキル、学習スキル、社会規範を守るスキルを向上させることを意図したプログラムが組まれている。日本の夏季休暇の期間に合わせ、2週間集中して実施される。

くるめ STP の参加者の養育者に PREQ を用いた質問紙調査を実施し、くるめ STP 前後の養育者の適応力を評価した。

外来を受診する発達障害児をもつ養育者に対する調査

適応力を高める要因を明らかにするために、外来を受診する発達障害児をもつ養育者を対象に調査を行った。家族や地域のサポートの状況の評価するために、質問票を作成した。養育者が子育てに関わると考える人のできる限り記載し(最大 10 名) その人が、養育者にとって好ましいか、好ましくないかを

評価するように要請した。また、全般的な適応力を評価するために、Connor-Davidson Resilience Scale (CD-RISC) を用いた。

文献的検討

発達障害児をもつ養育者に関わる文献をまとめ、研究代表者が中心となって実施してきた研究を位置づけた。

4. 研究成果

夏季治療プログラムの参加児の養育者を対象とした調査

くるめ STP 前後の PREQ の各下位項目の得点を比較したところ、くるめ STP 前よりもくるめ STP 後において、PREQ の各下位項目の得点が高かった(図 1)。くるめ STP は、子どもを対象にした治療プログラムであるが、養育者に対しても適応力を向上させる効果があることが示された。

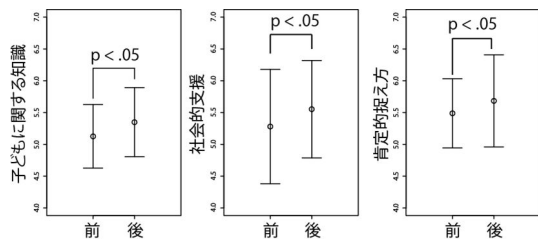


図 1. くるめ STP 前後の PREQ 得点の変化

外来を受診する発達障害児をもつ養育者に対する調査

家族・地域のサポートの量(人数)と PREQ の下位項目「子どもに関する知識」、「社会的支援」、「肯定的な捉え方」の相関関係を検討したところ、サポート量と社会的支援に正の相関関係が認められた($r = .27, p < .001$)。すなわち、子育てに関わる人が多いほど、社会的支援面の適応力が高いことが明らかになった。他の下位項目とサポート量の有意な相関関係は認められなかった。

CD-RISC と PREQ の関係では、CD-RISC 得点が、各下位項目と有意な相関関係があった(子どもに関する知識: $r = .43, p < .001$; 社会的支援: $r = .45, p < .001$; 肯定的な捉え方: $r = .42, p < .001$)。つまり、全般的な適応力が高ければ、子育てに対する適応力も高いことが明らかになった。

文献的検討

発達障害児をもつ養育者を取り巻く環境、レジリエンスの概念、既存のレジリエンスの尺度、養育レジリエンスのモデルと尺度をまとめた。さらに、発達障害児(者)をもつ養育者に適用される他の尺度と PREQ の関係を検討したところ、PREQ は、発達障害児に関わる問題と養育者の行動や精神状態を媒介・調整する要素を計測する指標である示唆された(図 2)。つまり、適応力を媒介として、養育行動や精神状態が変化するので、適応力を

高めるような支援が必要であると考えられる。本研究で、検討してきたように、子どもに対する治療プログラムや養育者に対するサポートを拡充させる支援が有効であると考えられた。

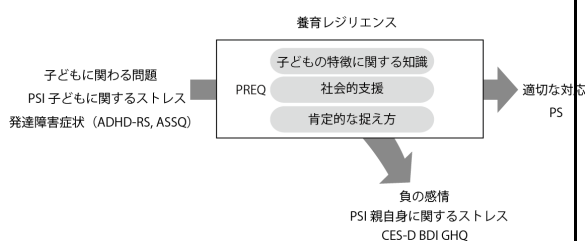


図 2. PREQ と他の尺度の関係(鈴木 稲垣, 2017)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

Suto M, Kita Y, Suzuki K, Misago C, Inagaki M, 1. Mental Health Inventory for Infants: Scale Development and Japanese Infants' Characteristics, Journal of Child and Family Studie, 査読有、印刷中

Suzuki K, Kita Y, Sakihara K, Hirata S, Sakuma R, Okuzumi H, Inagaki M, Uniqueness of action monitoring in children with autism spectrum disorder: Response types and temporal aspects, Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology, 査読有、印刷中

Oi Y, Kita Y, Suzuki K, Okumura Y, Okuzumi H, Shinoda H, Inagaki M, Spatial working memory encoding type modulates prefrontal cortical activity, NeuroReport, 査読有、28, 2017, pp. 391-396, DOI: 10.1097/WNR.0000000000000761

鈴木浩太、稲垣真澄、発達障害児(者)をもつ養育者のレジリエンス：尺度の開発と適用について、精神保健研究、査読有、67, 2017, pp. 63-71

Kita Y, Suzuki K, Hirata S, Sakihara K, Inagaki M, Nakai A, Applicability of the movement assessment battery for children-second edition to Japanese children: A study of the age band 2, Brain & Development, 査読有、38, 2016, pp. 706-713, DOI: 10.1016/j.braindev.2016.02.012

Suzuki K, Kita Y, Kaga M, Takehara K, Misago C, Inagaki M, The association between children's behavior and parenting of caregivers: a longitudinal study in Japan, Frontiers in Public Health, 査読有、4 (17), 2016, 10.3389/fpubh.2016.00017

Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Hiratani M, Watanabe K, Yamashita Y, Inagaki M, Development and evaluation of a Parenting Resilience Elements Questionnaire (PREQ) measuring resiliency in rearing children with developmental disorders, PloS One, 査読有、10(12), 2016, e0143946, DOI: 10.1371/journal.pone.0143946

Suzuki K, Shinoda H, Transition from reactive control to proactive control across conflict adaptation: An sLORETA study, Brain and Cognition, 査読有、100, 2015, pp.7-14, DOI: 10.1016/j.bandc.2015.09.001

Goto T, Kita Y, Suzuki K, Koike T, Inagaki M, Lateralized frontal activity for Japanese phonological processing during child development, Frontiers in Human Neuroscience, 査読有、9, 417, 2015, DOI: 10.3389/fnhum.2015.00417

[学会発表](計5件)

鈴木浩太、エキスパートレクチャー エラー関連陰性電位 (招待講演) 第46回日本臨床神経生理学学会学術大会、2016年11月30日、ホテル八まつ(福島県郡山市)

Suzuki K, Okumura Y, Kita Y, Oi Y, Shinoda H, Inagaki M, Involvement of frontal activities in proactive inhibition depends on the proportion of incompatible stimuli: a simultaneous EEG and NIRS study, 31st International Congress of Psychology (ICP2016)、ポスター発表、2016年7月29日、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

鈴木浩太、篠田晴男、フランカー課題におけるN1成分に対する競合適合効果、日本心理学会第79回大会、ポスター発表、2015年9月22日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

Suzuki K, Hirata S, Kita Y, Sakihara K, Inagaki M, Nakai A, A preliminary study of the movement assessment battery for children-second edition on Japanese children: Age band 1、The 11th International Conference on Developmental Coordination Disorder、ポスター発表、2015年7月2日、トゥールーズ(フランス)

鈴木浩太、篠田晴男、フランクカー課題における競合適合効果と刺激前脳波活、日本生理心理学会第33回大会、ポスター発表、2015年5月24日、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 浩太 (SUZUKI Kota)

国立精神・神経医療研究センター精神保健
研究所・知的障害研究部・流動研究員

研究者番号：20637673

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

稲垣 真澄 (INAGAKI Masumi)

平谷 美智夫 (HIRATANI Michio)

山下 裕史朗 (YAMASHITA Yushiro)